

# 日本の伝承遊び歌と 英語圏の伝承遊び歌に見られる融合と拡張

—「月火水木」型の縄跳び歌に見られる拡張のメカニズム—

中 澤 紀 子

## 0. はじめに

中澤(2009)では、英語圏の伝承遊び歌の一つとしてよく知られる、*Here we go round the mulberry bush* で始まる輪遊び歌と、*Here we go gathering nuts in May* で始まる‘はないちもんめ’型の間答歌を中心として、歌の詩句の融合と拡張について考察した。

その融合と拡張の際に重要な役目を果たしたのが、上記2つの型のバラッドのリフレインに現れる *On a cold and frosty morning* という共通の詩句であった。

また、その交替形である *So early in the morning* という詩句を基点として、*Here we go round the mulberry bush* で始まる輪遊び歌の第2スタンザ以降が、「朝の家事」の動作を羅列する歌から、「毎朝の家事」の種類を月火水木金土日に振り分けることによって「一週間の歌」へと拡張するという興味深い例を見てきた。

本研究の目的は、上に述べたような「英語圏の伝承遊び歌における詩句の融合と拡張」と比較すべく、「日本の伝承遊び歌における詩句の融合と拡張」について考察することである。その第1段階として、本稿では、日本の伝承遊び歌である「わらべうた」の中の縄跳び歌を対象にして、歌の詩句の拡張のメカニズムを探っていくことにする。

## 1. 「月火水木」型の縄跳び歌におけるバリエーション

「わらべうた」の中の縄跳び歌には、「大波小波」型をはじめ、「おじょうさんおはいり」型、「郵便やさん」型など、いくつかの代表的な歌の型がある。

本節では、「月 火 水 木 金 土 日曜日」で始まる「月火水木」型<sup>1</sup>の縄跳び歌について、いろいろなバリエーションを調べ、「元唄」といろいろな変種との関係を考察する。

### 1. 1. 奇妙な歌詞の縄跳び歌

筆者が小学生ぐらいの子供のころ、大縄を使って縄跳びをする時に、「月 火 水 木 金 土 日曜日」で始まる縄跳び歌といえば、次のような奇妙な歌詞の歌であったのを覚えている。

#### (1) 月火水木〔筆者の故郷版〕

月 火 水 木 金 土 日曜日  
 やまと一家のハイキング、電車にひかれてベッチャンコ  
 そらはいれ、そら出る。

また、この歌のメロディーは、次のようなものであった。筆者の記憶をもとに採譜したものを以下に示す。

<sup>1</sup> 月曜から日曜までの七曜を冒頭に歌い込んだ、縄跳び歌のひとつの型。尾原(1975)では、月曜から日曜までの七曜のみからなる型を基本形とし、「月火水木〔一〕」と表示している。また、その基本形に接続する後半部分の歌詞によって、「月火水木〔二〕」「月火水木〔三〕」「月火水木〔四〕」「月火水木〔五〕」に分けて表示している。

## (1) 月火水木 [筆者の故郷版]

(茨城)結城郡石下町<sup>いしげ</sup>

この奇妙な歌詞は一体どこから来たのだろうか。その源を探るべく、尾原(1975)および小泉編(1969a)で採集された、数多くの「月火水木」型の縄跳び歌を比較していくと、その原形らしきものが見えてくる。

(2) 月火水木 [二]<sup>2</sup>

月 火 水 木 金 土 日曜日

山とせ そよ吹けば さくらの伊豆<sup>いず</sup>こえてピーヒャラ ピーヒャラ 参内<sup>さんだい</sup>せ尾張<sup>おわり</sup>の神様 よんだいせ

そおらはいれ そおら出ろ

(新潟 直江津市)[尾原(1975: 258 - 9)]

<sup>2</sup> 註1で言及した、尾原(1975)の分類による「月火水木」型の下位類のひとつ。

この歌は、「月 火 水 木 金 土 日曜日」という基本形の後に、全く別のものと思われる歌が接続している型のもので、尾原(1975:259-60)によると、この系統の歌は意外に多く、主として近畿地方から東の各地に分布している。この歌のメロディーは、以下に、尾原氏が新潟県直江津市で採譜したものを示す。

月火水木〔二〕

(新潟)直江津市

げ つ か  
すい も く に ち よ - - う び  
き ん ど

や ま と せ  
そよ ふ け ば い ず こ え て -  
さ く ら の

ピーヒャラ ピーヒャラ さんだい せ おわりの かみさま

よんだい せ そら はいれ そら でーろ

この歌による縄跳びの跳び方は、地方によって様々だが、ひとつの型として次のような跳び方が示されている。

前半の七曜のところは〈一人跳び・一句交代〉即ち、一人が入って「月火」と2つ跳んだら次の子と交代し、次の子が「水木」と2つ跳

んだらまた次の子と交代するというように、「日曜日」まで跳ぶ。後半の「山とせ」以下は、〈三人跳び・一句交代〉即ち、一句ずつ順に跳び、そのまま残って〈三人跳び〉になり、最後の「そおらはいれ そおら出る」で、一人入って一人出る。

(2)の歌は、小泉編(1969a: 130)の分類に従えば、「ピーヒャラ型」のA型<sup>3</sup>に属し、この型は、「月火水木」型の縄跳び歌の中では、最も多くのバリエーションを持ち、元唄のおもかげを最も良く伝えている系統のものと考えられている。

それでは、(2)のような型の「元唄」から、どういう経過をたどって(1)のような、全く内容のかけ離れた奇妙な歌が派生されるのだろうか。

その細かなメカニズムを考察する前に、尾原(1975)および小泉編(1969a)で行われている「月火水木」型の縄跳び歌の下位分類と、それぞれの型を代表する歌詞を見ていこう。

## 1.2. 尾原(1975)による「月火水木」型の縄跳び歌の分類

尾原(1975)は、「月火水木」型の縄跳び歌を、五種の下位類に分け、「月火水木〔一〕」から「月火水木〔五〕」として、その代表例を示している。

### (3) 月火水木〔一〕

月 火 水 木 金 土 日 (北海道＝礼文郡礼文町)

(3)に示した「月火水木〔一〕」は、「月火水木」型の最も単純な形である。尾原(1975: 259)によると、このような七曜のみの形の縄跳び歌は、非常に実例が少なく、北海道と南紀州に見られるのみだという。

<sup>3</sup> 小泉編(1969a)による「月火水木」型の縄跳び歌の分類については、1.3節で詳しく述べる。

以下に、尾原氏による北海道礼文郡礼文町で採譜したものを示す。

月火水木〔一〕

(北海道)礼文郡礼文町

げつ かー すい もく きん どー にち

この歌による縄跳びの跳び方は、二人の子が長縄の両端を持って大きく回している中へ一人が入り、歌に合わせて7回跳んで、跳び終わったら縄の外へ出るという単純なものである。

次の「月火水木〔二〕」は、上の(2)で「月火水木」型の縄跳び歌の「元唄」らしきものとして挙げたものであるが、参照の都合上、(4)として再掲する。

#### (4) 月火水木〔二〕

月 火 水 木 金 土 日曜日  
 山とせ そよ吹けば さくらの <sup>いず</sup>伊豆こえて  
 ピーヒャラ ピーヒャラ <sup>さんだい</sup>参内せ  
<sup>おわり</sup>尾張の神様 よんだいせ  
 そおらはいれ そおら出ろ

(新潟=直江津市)[尾原(1975: 258-9)]

この歌詞に含まれる、子供には難解と思われる詩句の意味と詩句のバリエーションについて、尾原(1975: 260)では、概略、次のように解説している。

## (5) 「月火水木〔二〕」に含まれる詩句の意味とバリエーション

「山とせ」：山の風

「ピーヒャラ ピーヒャラ」：神社のお祭りのお囃子の笛の音

「参内せ」：「参詣」の意味で、「参内」(宮中に参上すること)という  
 言葉を使ったもの

他のバリエーションとしては、次のようなものがある。

「サンダース」(東京=板橋区、国分寺市、新潟=高田市)

「サンライス」(東京=清瀬市)

「サンダイシ」(長野=諏訪市、秋田=能代市、岩手=宮古市)

「サンダイス」(和歌山=西牟婁郡串本町、東京=板橋区)

「サンダイシュウ」(長野=飯田市・南佐久郡臼田町)

「尾張<sup>おわり</sup>の神様」：熱田神宮<sup>4</sup>のことと推測される。

この型の縄跳び歌では、「オワリノカミサマ」と歌うのが最も多く、東京、新潟、秋田、岩手の各都県に見られる。

他のバリエーションとしては、次のようなものがある。

「ヤマノカミサマ」：(長野=飯田市、山形=最上郡)

「ウミノカミサマ」：(和歌山=西牟婁郡串本町)

「オウミノカミサマ」：(島根=邇摩郡仁摩町)

ここで、この「月火水木〔二〕」の類歌として挙げられているものの中で、おもしろいフレーズを含む歌詞を以下に示す。

## (6) 月 火 水 木 金 土 日曜日

山風 そよ吹けば さくらの 花が咲く いずこじま

ピーヒャラ ピーヒャラ さんだんす

<sup>4</sup> 尾張の国、現在の愛知県名古屋市にある。主祭神は、草薙<sup>くさなぎ</sup>の剣<sup>つるぎ</sup>を神体とする熱田大神で、他に五神を祭る。

尾張の神様 さんらいす  
 茶つぼに追われて まちたばこ  
 そおれはいれ そおれはいれ  
 そおれ出エろ そおれ出エろ

(東京=清瀬市)[尾原(1975:260)]

(7) 月 火 水 木 金 土 日曜日  
 山とせ そよ吹けば 鬼の大将 三大将  
 ピーシャラ ピーシャラ 三大将  
 そおらはいれ そおら出ろ

(茨城=那珂湊市)[尾原(1975:261)]

(6)には、「さんだんす」「さんらいす」という意味のわからない語句が含まれている他に、「茶つぼに追われて まちたばこ」という特異なフレーズが現れている。これと同種のフレーズは、小泉編(1969a)で採集された歌の中にも、「茶つぼに追われて まきたばこ」「茶つぼに追われて まけたなら」という形で現れている。「茶つぼに追われて」という詩句は、手遊びを伴うわらべうたとしてよく知られた「ずいずいずっころぼし」の中に出てくるキーフレーズのひとつである。

(7)では、意味のわかりにくい「さんだいせ」の部分が「三大将」に変わり、それに伴って「おわりのかみさま」が「鬼の大将」に入れ替わってしまうというおもしろさを感じられる。

次に「月火水木〔三〕」「月火水木〔四〕」「月火水木〔五〕」を順に見ていこう。

(8) 月火水木〔三〕

月 火 水 木 金 土 日曜日  
 山の風 そよ吹けば 鳴子なるこがひびく



ピーヒャラ ピーヒャラ ピーヒャララ  
 そォらはいれ そォら出ろ

(栃木=宇都宮市)[尾原(1975: 261)]

(9) 月火水木〔四〕

月 火 水 木 金 土 日曜日  
 そよ風 そよ吹けば さくらの 花が咲く  
 ピーヒャラ ピーヒャラ  
 一年生 二年生 三年生 四年生 五年生 六年生  
 中学生 高校生 大学生

(秋田=横手市)[尾原(1975: 261)]

(10) 月火水木〔五〕

月 火 水 木 金 土 日曜日  
 春風 そよ吹けば 電車に乗って ハイキング  
 そォらね そォらね

(山形=鶴岡市)[尾原(1975: 261)]

「月火水木〔三〕〔四〕〔五〕」は、いずれも「月火水木〔二〕」の変  
 化形と見られる。その経緯を、尾原(1975: 262)は、「もとうたの意味  
 がわからないために、子供たちはそこに新しい意味づけをして、その  
 新しい意味に合うように、歌詞を変化させます。」と説明している。

これを、仮に、元唄としての「月火水木〔二〕」から「月火水木〔三〕」  
 「月火水木〔四〕」「月火水木〔五〕」などの歌が派生していく過程と捉  
 えなおすと、そこには、①音からの意味の想像、②語から喚起される  
 イメージ、③連想、④発想の飛躍といった、英語圏の「マザー・グー  
 スのうた」に見られるような特徴が見られる。

つまり、具体的にいえば、元になっている「月火水木〔二〕」の歌詞の中に、「山とせ」、「伊豆こえて」、「参内せ」、「尾張」、「よんだいせ」、などの、子供には音から意味が想像しにくいことばが含まれているために、この種の派生過程では、それらの難解語を捨てて、「そよ吹けば」のような、子供にもわかる部分の音やイメージから連想されるものへと新しい展開が生まれたのではないだろうか。そこで、「そよ吹く」ものは、「山の風」であったり、「そよ風」であったり、「春風」になったりする。さらに、「春風」からの連想で、「電車に乗ってハイキング」という発想の飛躍が起こったのではないだろうか。

また、この種の派生過程とは別に、上掲の(6)に見られるように、難解語を捨てずに、意味がわからないまま保持したり、また、上掲の(7)に見られるように、難解語の音や音の一部をもとにして、連想や発想の飛躍によって別の展開が生まれる場合もある。このような展開あるいは「拡張」のメカニズムについては、第2節で詳しく見ていく予定である。

尾原(1975:263)では、また、上掲の(10)で見た「月火水木〔五〕」の類歌として、次のような興味深い歌を挙げている。

(11) 月 火 水 木 金 土 日曜日

山へハイキング すべっころんで一等賞

(東京)[尾原(1975:263)]

(12) 月 火 水 木 金 土 日曜日

山の一家のハイキング 電車にひかれてペッシャンコ

それぬける それはいろ

(秋田=秋田市)[尾原(1975:263)]

(12)の歌には、(1)で示した「月火水木〔筆者の故郷版〕」の奇妙な歌のキーフレーズと類似の「電車にひかれてペッシャンコ」が出現し

ている。

### 1. 3. 小泉編 (1969a) による「月火水木」型の縄跳び歌の分類

小泉編(1969a)では、「月火水木」型の縄跳び歌を「月 火 水 木 金 土 日曜日」という基本形につづく後半部分の歌詞によって、A～Jの十種の型に分類している。また、それらをもっと大きくまとめて、「ピーヒャラ型」「ハイキング型」「他の歌との結合理型」「その他」の四種に大別する方法も示している。

本節では、便宜上、その2つの分類をまとめて、(13)に示し、本稿での議論に関係する型について、それぞれの型の特徴を簡単に見ておくことにする。

#### (13) (I) ピーヒャラ型

- A: ピーヒャラ型。「おわりの神さま…」「ピーヒャラ」の両方もしくは片方を含むもの。
- B: ピーヒャラ型で都節テトラコードを含むもの。
- C: げっくりがっくり型。冒頭が「げっかすいもく」の変形で、後半はピーヒャラ型が多い。

#### (II) ハイキング型

- D: ハイキング、電車にひかれてペッチャンコ型
- E: ハイキング、すべてころんで一等賞型
- F: その他のハイキング型

#### (III) 他の歌との結合理型

- G: 「朝鮮の山奥で」との結合理型
- H: 「山寺の和尚さん」との結合理型
- I: 「ほらほら青山の」との結合理型

## (IV) その他

J : その他。J<sub>3</sub>は「…日曜日」までの退化型。

上掲の(3)に示した、七曜だけの単純な歌である「月火水木〔一〕」は、小泉編(1969a)による下位分類では、「(IV) その他」の中のJ<sub>3</sub>に相当し、「元唄」から七曜以降の部分をそぎ落とした退化型として扱われている。

上掲の(2)に示し、(4)に再掲した、「元唄」と思われる歌は、「(I) ピーヒャラ型」の中のA型の「ピーヒャラ型」に属するものである。小泉編(1969a)でも、この系統の歌を「元唄」と考えている根拠は、ひとつには、上に述べたように、この型のバリエーションが最も多いことであるが、もうひとつの根拠は、この歌が、一見して意味の通らない歌詞を持ち、しかも、その歌詞が、他には見られないこの歌独自のもので、その歌詞を源にしていろいろのバリエーションが出てきているように見えることである。この二つめの根拠については、第2節で具体的に見ていくことにする。

(II)のD・E・Fの「ハイキング型」は、いずれも(I)の「ピーヒャラ型」に比べて、難解語がなく、簡潔で、歌詞の意味がよくわかる歌である。

小泉編(1969a:130)の解説によると、「ハイキング型」は、この当時、新しいけれども急速に広まっており、実際に、昭和42年春の新宿区西部の集中調査では、「ピーヒャラ型」はすっかり影をひそめ、圧倒的に「ハイキング型」であったという。

(III)のG・H・Iは他の縄跳び歌との結合型である。また、他の歌との結合型は、(III)以外の類の一部にも見られる。

## 2. 「月火水木」型の縄跳び歌における詩句の変化と拡張のメカニズム

本節では、第1節の(2)および(4)に挙げた、「月火水木」型の縄跳び歌の「元唄」と思われるものから、筆者の故郷版である(1)を含め

て、いろいろな変種が派生する過程を、言語の認識に関わる一般理論として、ある種の「拡張のメカニズム」の存在を仮定することによって、説明しようと思う。

## 2. 1. 「ピーヒャラ型」におけるバリエーション

まず、「元唄」に出てくる、子供たちには難解と思われる詩句を中心に、尾原(1975)と小泉編(1969a)で収集されたバリエーションをまとめて、以下に示す。その際、小泉編(1969a)の分類をもとに、「(I)ピーヒャラ型」と「(II)ハイキング型」に分けて、この順に考察していくことにする。(以下、尾原(1975)からの例は、カタカナで、小泉編(1969a)からの例は、ひらがなで表記する。後に続く( )内は想定される意味を表す。)

### (14) 「(I)ピーヒャラ型」における「元唄」の詩句の意味と他のバリエーション①

「山とせ そよ吹けば」の「山とせ」：山の風?

他のバリエーション

「ヤマカゼ(山風)」「ヤマノカゼ(山の風)」「ソヨカゼ(そよ風)」

「やまかぜ(山風)」「やまどの」「やまとの(大和の)(倭の)」

「やまのかぜ(山の風)」「やまなかで(山中で)」

「山とせ そよ吹けば」全体を置き換える他のバリエーション

「やまでらの おしよさんが(山寺の 和尚さんが)」

「やまたのさやおしわ」

「やまだの はやおきわ(山田の 早起きは)」

→ { 「静かな森へ」 }  
 { 「静かなお金？」 }

→ 「ピーヒャラ ピーヒャラ さんざえもん

尾張の神様 さんざいもん(散財?もん)」

「やまおくの(山奥の)」

→「おーみのかみさま(近江の神様?) さんだいき」

なお、上記の→は、それに続く詩句が「元唄」と著しく違っている場合の詩句を表す。

## 2.2. 詩句の拡張のメカニズム

ここで、上に挙げた「山とせ」のバリエーションの派生の仕方を大きくAとBの2タイプに分けて考えてみる。

Aタイプは、「意味」を保持したまま「語句」が変わるもので、上の例では、「山とせ」が「やまかぜ(山風)」や「やまのかぜ(山の風)」に変わる例に相当する。

Bタイプは、「音」の一部を保持したまま「意味」が自由に拡張するもので、上の例では、このBタイプをさらに2つの下位類B1タイプとB2タイプに分けることができる。

B1タイプは「山とせ」の[yama]という音を保持して、その音から想起される「山」という意味から自由な連想によって「やまなかで(山中で)」「やまでらの(山寺の)」「やまだの(山田の)」「やまおくの(山奥の)」などに拡張する例に相当する。このうち、「やまでらの(山寺の)」という詩句は、他の歌や詩句で言い習わされた、「山寺の 和尚さんが」というフレーズへとさらに拡張していることがわかる。

B2タイプは、「山とせ」の[yamatose]という音を、異分析によって[yamato]をひとまとまりと捉え、[yamato]という音を保持して、その音から想起される「やまとの(大和の)(倭の)」という詩句に拡張していく例に相当する。

今、具体例を挙げて述べてきた「拡張」の様式をもう少し一般化してみると、以下のようなになる。

(15) ある語句から他の語句への「拡張」の様式には、次の2つのタイ

プがある。<sup>5</sup>

Aタイプ：ある意味範疇Xに属する、ある語句 $x_1$ が出現すれば、同じ意味範疇に属する他の語句 $x_2$ の出現も可能になる。

Bタイプ：ある意味範疇Xに属する、ある語句xが出現したとき、xと音の一部を共有するyが出現すれば、そのyが属する意味範疇Yへの拡張が可能になる。

これに(15)の例を当てはめると、Aタイプの「拡張」におけるXは、山風を表す意味範疇、 $x_1$ は、「山とせ」、 $x_2$ は、「山風」「山の風」に当たる。

Bタイプの「拡張」におけるXは、Aタイプの場合と同様に、山風を表す意味範疇、xは「山とせ」である。B1タイプでは、xと[yama]という、語頭から2拍分の音を共有するyは、「山中」「山寺」「山田」「山奥」などであり、それぞれ、「山中で」「山寺の」「山田の」「山奥の」など、山に関係する場所を表す意味範疇Yへの拡張が起こる。B2タイプでは、xと[yamato]という、語頭から3拍分の音を共有するyは、「大和」「倭」であり、「大和の」「倭の」など、古称として日本の地方や国を表すという意味範疇Yへの拡張が起こっている。

### 2.3. 元唄の詩句から他のバリエーションへの拡張

(15)で提案した「拡張」の様式の仮説を、「元唄」の他の詩句にも当てはめて、その妥当性を検証してみよう。

<sup>5</sup> (15)に述べた「拡張」の様式は、K. Nakazawa (2008: 92-93)の「拡張のひとつの様式(A Mode of Extension)」にさらに一般化できるかもしれない。

(16) 「(I)ピーヒャラ型」における「元唄」の詩句の意味と他のバリエーション②

「さくらの いずこえて」の「いずこえて」：伊豆<sup>いず</sup>越えて？

他のバリエーション

「しずこえて」「すずこえて」「いまいずこ(今何処)」

「いずかずれに」「いつ(何時)こえて」「しずかな(静かな)うえて」

「しずかなる(静かなる)」「すずがなる(鈴が鳴る)」

「もずこずえ(百舌<sup>もず</sup>?梢?)」

「さくらの いずこえて」全体を置き換える他のバリエーション

「さくらの はながちる いずこしま/いずこじま(桜の 花が散る 伊豆小島)」

「しずかなもりえ(静かな森へ)」

「しずかなおかね(静かなお金?)」

「さくらの はなとじる(桜の 花閉じる)」

「さくらの はなも(桜の花も)」「いず(伊豆)こえて」

「さくらの いずこえて」の代わりに

「おわりのかみさま さんだいし」のバリエーションが入る例

「もりのかみさま(森の神様)さんだ一す/さんざいし/さんだいし」

「おにのかみさま(鬼の神様)さんだいじ/さんだいし」

「おわりのかみさま さんだいじん」「もみのかみさま さんだいし」

「そよふけかみさま さんだ一す」

「おにのたいしょー(鬼の大將)さんどーり/さんだいし」

ここでは、「さくらの 伊豆こえて」の「いず」に焦点を当てて、拡張の様式を見ていくことにする。この拡張も、(15)のAタイプとBタイプに相当するものに分けられる。

Aタイプに当たるものとしては、「伊豆」の意味を保持して、「伊豆



小島」に変わる例が見られる。

一方、Bタイプに当たるものは、数多く見られる。そのうちB1タイプでは、[izu]という音の一部を共有して、「しず」「すず」「いつ」「もず」などが出現し、中間段階の「しずこえて」「すずこえて」を経て、さらに、意味の通ることばにしようとする方向に連想が働いて、「静かなる」「鈴が鳴る」「何時こえて」「もずこずえ(百舌梢)」などに拡張すると考えられる。このうち、「静かなる」は、さらに、自由連想によって、「静かな森へ」などに発展し、発想の飛躍を伴うようになる。

また、B2タイプでは、「いずこえて」の[izukoete]という音を、異分析によって[izuko]をひとまとまりと捉え、[izuko]という音を保持して、その音から想起される「いまいずこ(今何処)」という詩句に拡張していくと考えられる。

(17) 「(I)ピーヒャラ型」における「元唄」の詩句の意味と他のバリエーション③

「ピーヒャラ ピーヒャラ さんだいせ」の「さんだいせ」：参内せ  
他のバリエーション

「サンダース」「サンライス」「サンダイシ(参内し)」

「サンダイス(参内す)」

「サンダイシュウ」

「さんだいし」「さんだいしゅ」「さんだーす」「さんどーす」

「さんびょうし(三拍子)」「さんざいもん」「さんざえし」

「さんざえもん」

「さんかいめ(三回目)」「さんだいじ」「さんざいし(散財し?)」

「さんだいじん(三大神/三大臣/三大尽)」

「さんだいめ(三代目)」「さんだえす」

このフレーズの「さんだいせ」に見られる拡張の様式にも、(15)の

Aタイプに当たるものとBタイプに当たるものがある。「参内(する)」という意味範疇を保って語形を変えるものには、「サンダイシ(参内し)」と「サンダイス(参内す)」がある。

また、Bタイプに当たるものは、数多く、[sanda]までの音を共有して拡張したものには、「さんだ一す」「さんだいじん(三大神／三大臣／三大尽)」「さんだいめ(三代目)」などがあり、[san]までの音を共有して拡張したものには、「さんびょうし(三拍子)」「さんかいめ(三回目)」「さんざいもん」「さんざえもん」などがある。

(18) 「(I)ピーヒャラ型」における「元唄」の詩句の意味と他のバリエーション④

「おわりのかみさま よんだいせ」または、  
「おわりのかみさま さんだいし」における

「おわりのかみさま」:「尾張の神様」

他のバリエーション

「ヤマノカミサマ(山の神様)」「ウミノカミサマ(海の神様)」

「オウミノカミサマ(近江の神様)」

「おてら(お寺)のかみさま」「おわりのとのおさま(尾張の殿様)」

「おわりのかみさん」

「おわりのかみさま よんだいせ」の「よんだいせ」:(意味不明)

他のバリエーション

「さんだいし(参内し)」「よんだいし」「じゅうろくで(十六で)」

「さんだ一す」

「さんど一す」「さんびょうし(三拍子)」「よんだ一す」

「さんざいもん」

「さんざえし」「よんざえもん」「ごだいし」「さんだえす」

「おわりのかみさま」については、後半の「かみさま(神様)」を保持して前半が変わる、「ヤマノカミサマ(山の神様)」「ウミノカミサマ(海の神様)」「オウミノカミサマ(近江の神様)」「おてら(お寺)のかみさま」などのタイプと、前半の「おわりの(尾張の)」を保持して後半が変わる、「おわりのとのさま(尾張の殿様)」「おわりのかみさん」などのタイプに分けられるが、先に見た(16)のバリエーションの中には、「おわりのかみさま」が「おにのかみさま(鬼の神様)」に変化し、さらに「おにのたいしょー(鬼の大將)」に変化して、元の詩句の原形を留めないものにまで拡張している例が見られる。

なお、「よんだいせ」については、前の句の「さんだいせ」の「さん(三)」を「よん(四)」に置き換えたものと推測される。

#### 2.4 「ハイキング型」におけるバリエーション

小泉編(1969a)の分類による「ハイキング型」は、さらにDの「電車にひかれてペッチャンコ型」、Eの「すべてころんで一等賞型」、Fの「その他のハイキング型」に下位分類されるが、本節では、特に、(1)の歌に関係する「電車にひかれてペッチャンコ型」への「拡張」の経緯に焦点を当てて、そのバリエーションを見てみよう。

1.2節の(10)(11)(12)で、「月火水木」型の縄跳び歌に「ハイキング」という語が登場する例を見た。小泉編(1969a)の分類に照らすと、(12)は「電車にひかれてペッチャンコ型」、(11)は「すべてころんで一等賞型」、(10)は、「その他のハイキング型」にはいる。参照の便宜上、(10)と(12)を(19)(20)として再掲する。

(19) 月 火 水 木 金 土 日曜日

春風 そよ吹けば 電車に乗って ハイキング

そおらね そおらね

(山形=鶴岡市)[尾原(1975: 261)]

(20) 月 火 水 木 金 土 日曜日

山の一家のハイキング 電車にひかれてペッシャニコ  
それぬける それはいろ

(秋田=秋田市)[尾原(1975:263)]

小泉編(1969a)の採集した「月火水木」型の縄跳び歌の中には、次に示すように、「元唄」に近いA型の「ピーヒャラ型」に属する歌にも「ハイキング」という語が登場する例がある。

(21) 月 火 水 木 金 土 日曜日

やまえ ハイキング おわりのかみさま さんだいじん  
ピーヒャラ ピーヒャラ さんだいし  
そらはいれ そらでーろ

(港区 青南小学校)[小泉編(1969a:124-5)]

また、「ハイキング型」に属する縄跳び歌の中で「その他のハイキング型」に入るものには、次のような歌がある。

(22) 月 火 水 木 金 土 日曜日

やまのかぜ そよふけば 電車におわれて ハイキング  
そらはいれ そらぬける

(墨田区 両国小学校4年生)[小泉編(1969a:128)]

(23) 月 火 水 木 金 土 日曜日

やまえ ハイキング 電車に乗って ハイキング  
そーらでーろ そーらでーろ

(中野区 江原小学校4年生)[小泉編(1969a:128)]

(24) 月 火 水 木 金 土 日曜日

やまえ ハイキング 電車に乗って ピーポッポ  
そらはいれ そらはいれ

(世田谷区 三軒茶屋小学校3年生)[小泉編(1969a: 128)]

## 2.5. 「ピーヒャラ型」から「ハイキング型」への歌の拡張のメカニズム

本節では、2.2節で提案した「拡張」の様式を用いて、「ピーヒャラ型」から「ハイキング型」への歌の拡張のメカニズムを探ってきたい。

まず、(21)の歌が、(2)および(4)に挙げたような「元唄」から派生してくる過程を考えてみよう。

(15)のBタイプの拡張様式に従って考えると、「山とせ」の[yama]という音を保持して、その音から想起される「山」という意味から「山へ」という詩句が派生し、さらに、現代の日常生活における連想から「山へ ハイキング」というフレーズが生まれたと考えられる。

また、(19)から推測されるように、「山とせ そよ吹けば」の「そよ吹けば」をそのまま保持して、そこから「そよ吹くもの」といえば、「春風」という連想が働き、さらに、「春風 そよ吹けば」から「電車に乗って ハイキング」へと現代的な発想が次々と展開したものと考えられる。

## 2.6. 「ハイキング型」から「電車にひかれてペッチャンコ型」への歌の拡張のメカニズム

本節では、普通の「ハイキング型」から「電車にひかれてペッチャンコ型」への拡張の過程について考察する。

小泉編(1969a)で採集された「電車にひかれてペッチャンコ型」の例には、次のようなものがある。(以下の例では、月曜から日曜までの七曜の部分は省略して、それに続く部分のみを示す。)

(25) やまえ ハイキング 電車にひかれてぺっちゃんこ

- おもちのよーにぺっちゃんこ  
 そらはいれ そらでーろ (世田谷区 駒沢小学校5年生)
- (26) やまといっかの ハイキング 電車でひかれてぺっちゃんこ  
 おもちのよーにぺっちゃんこ  
 でろでろはいろ ハイ (品川区 第三日野小学校4年生)
- (27) やまといっかの ハイキング 電車でひかれてぺっちゃんこ  
 そらはいれはいれ でろでーろー でろでーろ  
 (品川区 鈴ヶ森小学校4年生)
- (28) やまといっかの ハイキング 電車でひかれてぺーちゃんこ  
 (世田谷区 瀬田小学校4年生)

以上の例を含む「電車でひかれてぺっちゃんこ型」への拡張の様式を探るために、「元唄」の「山とせそよ吹けば」に相当する部分のバリエーションを(29)にまとめて示す。

- (29) 「電車でひかれてぺっちゃんこ型」における「元唄」の詩句に対するバリエーション

「山とせ そよふけば」

他のバリエーション

- 「やまえ(山へ)ハイキング」「やまといっかのハイキング」  
 「やまのこ ハイキング」「はなこさん ハイキング」  
 「やまかぜ(山風)ハイキング」「やまで(山で)ハイキング」  
 「やまなかえ(山中へ)ハイキング」

ここで働いている拡張のメカニズムも、AタイプとBタイプに分けられる。Aタイプは、意味を保持して詩句を変えるもので、「山とせ」が「やまかぜ(山風)」となる例がある。Bタイプは、音の一部を保持して別の意味範疇へ拡張する例である。Bタイプのうち、B1タイプ

は、[yama]という音を保持して、「やまえ(山へ)」「やまのこ」「やまで(山で)」「やまなかえ(山中へ)」などに拡張する例である。B2タイプは、[yamato]までの音を保持して、「やまと一家の」に拡張する例である。

最後の「やまと一家の」に拡張する例については、後ろに続く「ハイキング」という語からも、「一家そろってハイキング」という連想によって、その拡張の方向が後押しされるのではないだろうか。この連想は、(20)の「やまの一家のハイキング」というフレーズの派生にも働いていると思われる。また、小泉編(1969a)で採集された次の例では、「一家そろってハイキング」というフレーズが、そのイメージを保持しながら、「家内そろってピクニック」という別のフレーズに変化している点が興味深い。

(30) やまもとさんちの おじさんが  
       かないそろって ピクニック  
       そらはいれ そらでーろ

(東京 千代田区 芳林小学校3年生)

最後に、「電車にひかれてペッチャンコ」というフレーズがどこから出てきたのかについて考察する。

(19)(23)では、「電車に乗って ハイキング」、(24)では、「電車に乗って ピーポッポ」と、平穏無事で楽しげであるのに、(22)では、「電車に追われて ハイキング」となっており、もはや平穏無事ではなくなっている。これは、(6)に見られるような「茶つぼに追われて」という、他の歌で歌い習わしたフレーズと合体したものと思われる。そして、さらに、平穏無事な内容だけでは物足りない子供たちのパワーが、より過激な内容を求め、「電車にひかれてペッチャンコ」というフレーズを生み出したのではないかと筆者は考える。それと同時に「ペッチャンコ」や「ペッシャンコ」「ベッチャンコ」という音のおもしろ

さが当時の子供たちに受けて、このフレーズが広まり、定着したのではないだろうか。

この二つの点、すなわち、時に残酷で過激な内容や表現を持っていることと、音のおもしろさを重視していること。これらは、英語圏の「マザー・グースのうた」にもまさに当てはまる、伝承遊び歌に共通する特徴である。

### 3. まとめと今後の展望

英語圏の伝承遊び歌と日本の伝承遊び歌において、しばしば見られる詩句の融合と拡張という現象について、本稿では、特に、日本のわらべうたの中の「月火水木」型の縄跳び歌に焦点を当てて、歌の詩句の拡張のメカニズムを探っていった。

第1節では、「月火水木」型の縄跳び歌のバリエーションのうち、筆者の故郷版の奇妙な歌詞がどうやって派生したのか、その源を探ることをひとつの動機として、いろいろなバリエーションを分類しながら、比較検討していった。

1. 1節では、尾原(1975)の分類を基にして、「元唄」から、いろいろな型の変種が派生していく過程を見ていった。その中で、「元唄」に、子供にとって音から意味が想像しにくい語句が含まれている時、大きく分けると、二つの方向の展開があることがわかった。

ひとつは、難解な語句を捨てて、子供にもわかる部分の音やイメージから連想されるものへと新しく展開していく方向。たとえば、「やまとせ」の意味がわからない時、それに続く「そよ吹けば」からの連想で、「そよ風 そよ吹けば」や「春風 そよ吹けば」などのフレーズが派生し、さらに、そこからの連想で、「電車に乗ってハイキング」という発想の飛躍が起こる。

もうひとつは、難解語を捨てずに、意味がわからないままその音を保持したり、また、難解語の意味や音の一部を保持して、それを基にして「拡張」という現象が起こる場合である。



第2節では、筆者の故郷版である(1)の歌を含めて、いろいろな変種が派生する過程を、言語の認識に関わる一般理論として、ある種の「拡張のメカニズム」の存在を仮定することによって、説明しようと試みた。2.2節では、その「拡張」の様式には、AタイプとBタイプの二つのタイプがあることを詳しく論じた。

さらに、2.5節では、「元唄」を含む「ピーヒャラ型」から、新たな「ハイキング型」への歌の拡張のメカニズムを、続いて2.6節では、普通の「ハイキング型」から「電車にひかれてペッチャンコ型」への拡張のメカニズムを探っていった。

今後は、「月火水木」型の縄跳び歌について、今回は紙面の都合で扱わなかった、詩句の「融合」についてまとめた上で、「月火水木」型の縄跳び歌の範囲をこえて、別の歌との合体・融合について、そのメカニズムを探っていきたい。

#### 参考文献 ※出版年代順

<英語圏の伝承遊び歌関係>

Opie, Iona and Peter (1951) *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, 1st ed., Oxford University Press.

Opie, Iona and Peter (1955) *The Oxford Nursery Rhyme Book*, Oxford University Press.

Opie, Iona and Peter (1959) *The Lore and Language of Schoolchildren*, Oxford University Press.

Baring-Gould, William S: and Ceil Baring-Gould (1962) *The Annotated Mother Goose*, Bramhall House, New York.

Willa Muir (1965) *Living with Ballads*, Oxford University Press, New York.

茂木健(1996)『バラッドの世界／ブリティッシュ・トラッドの系譜(British Traditional Music)』春秋社

Opie, Jona and Peter (1997). *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, 2nd ed.,  
Oxford University Press.

<日本の伝承遊び歌関係>

小泉文夫編(1969a)『わらべうたの研究—共同研究の方法論と東京のわらべうたの調査報告』楽譜編 わらべうたの研究刊行会 昭和44年初版 昭和57年再版

小泉文夫編(1969b)『わらべうたの研究—共同研究の方法論と東京のわらべうたの調査報告』研究編 わらべうたの研究刊行会 昭和44年初版 昭和57年再版

尾原昭夫(1972)『日本のわらべうた〈室内遊戯歌編〉』社会思想社

尾原昭夫(1975)『日本のわらべうた〈戸外遊戯歌編〉』社会思想社

<融合と拡張理論関係>

中澤紀子(2005)「V-ing: 動名詞と現在分詞の分類をめぐって」『英米文学論叢』第36号

Nakazawa, Noriko (2008) 'Where Gerunds and Participles Meet: A Note on the Syntactic Environment of V-ing' Tetsuya Sano et al. eds, *An Enterprise in the Cognitive Science of Language*. Hituzi Syobo Publishing, Tokyo.

Nakazawa, Kazuo (2008) 'The Role of Grammatical Dynamism in the Interpretation of Keats' *To Autumn*: Another Case for the Mode of Extension' Tetsuya Sano et al. eds, *An Enterprise in the Cognitive Science of Language*. Hituzi Syobo Publishing, Tokyo.

中澤紀子(2009)「英語圏の遊び歌に見られる融合と拡張: On a cold and frosty morning を手がかりにして」『英米文学論叢』第40号